

## 美術の窓(71)

## 「吉野子守明神画像」偶感 — 神像の眼差し —

大和文華館顧問 関口正之

大和文華館所蔵の「吉野子守明神画像」は画面右上に円相内の種子(大日如来)を描き添えた典型的な垂迹画であるが、女神が胸に抱える幼児と、画面左下の脇侍女性をともに小さく表わすことにより、大仏のように雄大な子守明神像であると感ぜられる。本像は子守明神という女神像を象徴する標識を単に描き並べたものではなく、この頼もしいほどの大きさは幼児の成長と無事を願う母の想いを反映したものに相違ないであろう。左下隅の婦人が脇侍ではなく母親であるのなら、女神の大きな懐こそ母の心を安堵させる場所であり、婦人が女神の脇侍であるのなら、女神の大きな姿は子を想う母親の願いの強さと大きさを暗示すると考えられる。女神の袴の緋色は画面中央のかんりの部分を占め、すぐ上方に抱かれる幼児を暖かく支えるかのように印象的である。しかし、女神の眼差しは人間のもつ感傷や感動を抑えて清澄である。これは作者が思い描いた子守明神の姿なのであろうか。

人物像鑑賞の面白さの一つは、

表されている風貌から、その人物の個性を想像してみることにある。仏像仏画でも本尊像の前に立つとその像と視線を合わせてしまう。顔、姿勢、着衣、背景等が表わされていくとしても視線は顔に戻る。とくに眼と口である。人間の眼と口とは表情が動く部分であり、その動きに人間の場合なら内面の何かが現われると思うからである。神仏の像に対しても、それが人間の姿をかたどったものであれば、人に向い合うように顔をみてしまう。仏像仏画の本尊の口は言葉を発しないから眼の表情に見入る。作者は神仏を表現する場合、人間を超えた何かを表わそうとしていると思うからであろう。鑑賞する我々が人間を理解することに未熟なため人物表現をとらえられない場合もあり、また作者の人間理解が不十分であったり技術が未熟で対象の個性を表現できない場合もあるであろうが、表現された個性の何ほどかは我々の感性に訴えてくる。しかも、性格を理解する能力、人を見る眼は経験を積むに従

って変容してゆくらしい。

このように人物像、祖師像、仏像を見てくると神像は少し様子が異なるように感じられる。吉野子守明神画像の眼差しは、仏像に見られる慈しみある眼とは異なり、喜びや悲しみが交錯する人間の心とは別の場所を見つめているようである。人間の姿として表わされた神々の像をみると、その眼はぬくもりというより澄んだ眼差しである。こうした視線の表現は他の神像にも共通する。

神像の視線は、彫像も画像も厳格で眉宇に強固な意志をただよわせるようにけわしい。多くの神像のいずれにもこのような眼に表現されていることは、中世の仏師・絵仏師にとってこの眼差しが神像表現の規範であったと考えることができるのではないだろうか。人間の眼に現われる心の動き、血が通った動揺を抑えた眼の表現に、人間を越えた存在である神々の特色を作者は托そうと考えたに相違ないと思えてくる。芸術表現の名手は、多くの人間の顔を注意深く観察する

ことを通して仏菩薩や神々のイメージを鮮明につくり上げてゆき、ついに造形表現に結実させたと思われる。吉野子守明神画像の思いつめたようにけわしい眼を眺め、人間の姿として出現した神々の姿を如何にして礼拝の本尊として表現しようと工夫したか、その苦心の一端をかいま見たように思えた。

吉野子守明神画像 南北町時代



脇侍女性



幼児



女神



季刊 美のたより No.129

平成11年11月19日

発行 大和文華館